

## 小学校教員養成課程における学生による運動会実施の意義

### The significance of sports day events put on by students during elementary school teacher training

藤井 千恵子, 三小田 美穂子, 池田 延行

Chieko FUJII, Mineko SANKODA, Nobuyuki IKEDA

#### I. 研究の目的と方法

こどもスポーツ教育学科においては、心身ともに充実した、高い専門性と優れた実践力をもった教員を育てることを目標としている。そこで、学生自身が企画し、運営する運動会を体験することは専門的な知識を獲得する点でも、心身ともに充実した教員となるためにも意義があると考えられる。

こどもスポーツ教育学科は、体育・スポーツ系の大学・学部にてできた小学校教員免許取得課程でもあり、この学校を卒業した学生は子どもの心と体を鍛えることと同時に運動会の運営に携わることが期待される。運動会に関する知識を得ること、運動会で実施される種目、一日の流れ、当日までの準備などについて単なる知識だけでなく、実際に体験しておくことは大変有意義である。また、学生が自主的に企画・運営することによって、行事を企画・運営していく力、コミュニケーション力、責任感などの教育者に必要な資質に気付くことができ、身につけることができると考えられる。

我々はこれまでに学生が自ら企画・運営する運動会がどのような意義を持つのかを実践を分析す

ることから探り、その分析から学生のさまざまな能力を伸ばすための実践方法について考察した。この研究より、学生が運動会の実践を通して、何に気づき、どのような能力が身についたのかを検討し、その意義を明らかにできたが、実践方法の分析にはまだ研究の余地がある。そこで、本研究では、この研究を継続し、小学校教員養成課程における運動会実施の意義の分析から、学生の能力を高めるのにふさわしい実践方法を検討し、さらに、近隣の小学校における運動会と昨年度の実践の分析から、よりよい運動会実施のあり方を探りたい。

#### II. 運動会の準備

##### 1. 当日までの流れ

月日	内容	
1月29日	第1回話し合い 前委員長より説明 ・趣旨、仕事の内容、プログラム、実行委員と係 ・準備の流れ 話し合い ・1年生が企画の中心となることが決定	呼びかけのためのチラシ

2月9日	委員会と係の役割分担 プログラムの決定 活動日程	資料1、 2
26日	当日までの流れと仕事の確認 実施日程を決定するために 小学校へ連絡	資料3
3月12日	プログラムの詳細決定 目的についての話し合い 当日までの流れと仕事内容 を書きだす作業	
19日	4月以降の予定の確認	
4月2日	作業進行表を用いて、仕事 内容の詳細を確認 実施日を決定するための小 学校への最終連絡	
3日	1年と2年への説明	資料4
15日	地理室での活動開始	
21日	アンケート製作 プログラムの詳細を検討	
26日	小学校訪問のための連絡を 取り始める	
30日	物品購入	
5月6日	1年、2年全体で係の割り 振り 看板作り、用具作り開始 小学校への挨拶開始	
13日	リハーサル 誘導練習 道具作り	
17日	3年生への説明 日程、内容 参加希望アンケート	
20日	1年生への参加 最終確認 作業	
26日	作業	
27日	リハーサル 13:00 2年生のみ 14:30 全学年 リハーサル後 実行委員会 と3年生で確認	
28日	進行表を完成	資料5
29日	前日準備 ・物品をそろえる 19時ごろからサッカー場の トラック作り	
30日	運動会当日	

## 2. 学生の話し合いの記録

### 第1回目

#### (1) 平成21年度の実行委員から

昨年度のミニ運動会の内容、係の種類とその仕事、実施に至るまでにいつ、何をするかといったプロセス、当日必要となる用具や連絡する担当者、参加する小学生を募るため小学校への協力依頼、リハーサルの必要性などについて説明を受けた。

また、何のためにミニ運動会を行うのか、中心となって実施するのかどの学年にするのか、などの提案を行った。

その結果、次年度のミニ運動会は、2年生が中心となって行い、3年はアドバイザーとしての役割を担うことになった。その際、前年度に実施した内容等についてしっかりと評価し、改善をしていくことを確認した。

#### (2) 平成22年度の実行委員から

今後の取り組みの計画について、以下のような確認を行った。

- ・4月に2年生全員に説明し、協力を依頼する。
- ・子どもとかわること、ミニ運動会の運営方法について学ぶことなどのねらいを2年生全員に伝え、確認する。
- ・実行委員と一緒に活動する係りを募集していく。

### 第2回目

#### (1) 前回の実行委員長から実施に当たっての具体的な説明を受ける。

物品の購入、プログラムの作成、係のリーダーの決定、放送台本、用具等の図面作成、得点板の作成、保健係りのインフルエンザ対応や怪我への対応、誘導や出発合図の方法、リハーサルや前日準備の方法、小学校への依頼文書やポスターの作成など

#### (2) 説明に基づいて決定すべき点を整理する。

- ・実行委員の確認 委員長、副委員長、書記、会計
- ・購入するもの 大玉(紅白) 綱引き 玉入れは既に購入

- ・種目を決める 玉入れ 大玉 綱引き しっぽ取り スポーツ講習会（アルティメット バレーボール サッカー）
- ・赤白に分ける 受付が担当

### 第3回目

(1) 新実行委員長からこれまでの経過説明と今後の方針について説明する。

- ・第1回目、第2回目の話し合いの報告
- ・近隣の小学校に連絡する
- ・本日は、プログラムの詳細を決定する

(2) プログラムについて協議し決定する。

〈運動会の目的について〉

なぜ運動会をするのか、何のためにやるのかしっかりと目的をもつ。このことは、将来教員になって運動会を企画する上で役立つ。さらに、スポーツを通して子どもと触れ合うことも重要である。

〈プログラムについて〉

なぜこの競技をやるかという目的をはっきりさせる。スポーツ講習会は競技をやっていた人が多く好評であったため。

しっぽ取りゲームでは、持久力・瞬発力を育てられる。また、児童集会などで取り上げられるので、やってみる価値はある。Gボールについては、けがをしないように一人の子どもに学生が一人つく。今度の学習指導要領に入るので取り入れられたことも理解しておく。リレーは団体競技の定番で一番盛り上がるので、やってみたい。

次に、先生としてどう対処するかをその場で判断することになり、そうした経験も重要である。開会式、閉会式も実施する。雨に場足についても考慮しておく。

リレー系をどうするかを決める。走るだけだと差が出てしまうので、障害をいれて足の早い遅いに関係のないようにしたらどうか。ゼッケンを借りて6色にして、なんとか行うようにする。

決定

- 1 開会式 2 玉入れ 3 障害物競争

4 スポーツ講習会 5 綱引き 6 閉会式  
〈進行について〉

進行は、臨機応変に進めることが大切だった。進行状況を確認し、逆算して時間を調整するとよい。

2時間で実施するために、一つ一つの内容について説明や移動の時間も含めて配分し、全体の進行を考慮する。また種目の順番も工夫する。休憩時間も必要

(3) 係りについて協議する。

必要な係りを洗い出して、全員にどこかに入ってもらおう働きかける。

### 第4回目

前回までの決定事項を確認し、近隣の小学校に実施することを伝える方法を考える。

### 第5回目

2年全体に実行委員から説明をする

実行委員長から、2年生全員の学生にこれまでの経過や今後の取り組みについて説明する。

部活動などで当日参加できない人は、看板やポスター 得点板などの文字や絵、色を塗るなどの作業をやってもらいたい。

係り：買出し（不足しているものを購入する）5月に用具確認 当日は、用具の管理 このように図面を作成しこれを見ながら

進行係り：プログラム作成 時間配分 音響 当日の司会者

受付係り：当日、何人来るかかわからない、赤白を決めるのは当日 結構大変な仕事 ビラ作り 参加者の組み分け 名簿作り はちまきの用意など

得点・決勝係り：

点数 得点配分の決定 ルールの説明 当日、やってもらいたい。

看板：作成 1年生にも呼びかける。

保健係り：当日、どんなけがが起きるかかわから

ないので準備、待機する。

誘導係り：大事な仕事 子どもを誘導する。交通安全も含まれる。「国士舘大学はこっち」などの声をかけることもやってもらう。大勢いたほうがよい。交通安全のお兄さん・お姉さんとして

## 第6回目

### 確認事項

- ・リハーサルは、まず実行委員だけで行う。
- ・体育館でのリハーサルは、声をかける。
- ・各学校に説明に行く。説明資料 8校 GW明けに行く  
だれがどの小学校に行くか決定し、アポをとるなどの訪問の仕方について確認する。
- ・ポスター ちらし 来週までに作成する
- ・早めに予定を出しておく
- ・係りのメンバーを決定する。

### 〈事後の話し合い〉

## 第7回 実行委員会

### 係り及び全体について

- ・全体的な流れの大筋は見えてきた。来年に引き継ぎたい。
- ・細部のこと たとえば机やテントなど誰が、どこに依頼していつ借りるのか、責任分担をする必要がある。
- ・連絡等が不適切であった。集合日時、作業等の内容を遅くとも前日までに連絡する。
- ・全体の計画の中に、いつ、誰が、何をするのかをしっかりと予定に入れる。あるいは、掲示板を活用して全員に見てもらうようにする。
- ・時期的なものは、鶴川祭で行うことが望ましい。
- ・1年生を巻き込むことが難しい。どのようにかわりを持ってばよいか、時間的なゆとりをもって連絡するなどの工夫が必要。伝えることは難しい。
- ・係ごとの掲示や進行表のチェックなども掲示して進めたらどうか。

- ・各学年の担当者を決めておくことも必要だろう。
- ・掲示板での徹底 実行委員会での話し合いなど必要なことを掲示する。担当を決める。
- ・広報担当を決め、配布する。同じものを掲示する。
- ・自由参加ではなく、全員参加にする運動会にする。
- ・全員参加にするための配慮も必要。
- ・方針は実行委員で決め、係ごとの活動を責任をもって進めてもらうようにする。
- ・より多くの人にかかわる機会をどのように作るか、実行委員の活動を理解してもらうことが大切。
- ・全員で話し合うこと だれかが必要 中心になる人
- ・各クラスからリーダーを決める。
- ・準備する時期を早める。
- ・12月から実行委員に1年生を入れ、クラスを巻き込んでいく。
- ・自分たちがリーダーとなり、伝統にすれば先輩と一緒にやる。3年生がかかるとペースが違った
- ・3年、2年両方いるとよい。引き継ぎをしっかりと行い、歴史を作っていく。
- ・実行委員会の新聞を作成し、掲示する。早めに活動を始めます、と書く。写真も入れる。
- ・決まったことを知らせる。全員に配る。伝統的にやっていきたい。再来年のこの時期に引き継ぎをすればよい。反省会も一緒にやる
- ・もう一度自分たちが主体になってやる。1年生にも実行委員会に参加してもらう。引き継ぎを行い、全体に伝わるような新聞を作成する。写真もつけて配る。
- ・スポーツ講習会について これをしたくて来ているので別にやったらどうか、という声があった
- ・講習会がなくなると来る子がなくなる 別にもう一回やりたい
- ・小学校に行ってスポーツ講習会を開く。

- ・特色がそこにある アルティメット Gボール など

#### 〈スポーツ講習会の実施〉

小学校 町会の子どもの会の依頼により、スポーツ講習会を実施

- ・実行委員を中心に13名の学生が50名ほどの子どもたちを対象にスポーツ講習会を行った。
- ・Gボール、アルティメットを中心に、子どもたちへの指導、ふれあいなどを実地に学ぶことができた。
- ・こどもスポーツ教育学科にふさわしい地域貢献の第一歩を踏み出すことができた。

#### 〈小学校の運動会にボランティアとして参加〉

小学校の運動会にボランティアとして実行委員6名が参加

- ・ライン引きの担当と1年生の学級に入っの指導補助を行った。
- ・実際の運動会に参加し、進行や係りなどの運営方法、大勢の子どもへのかかわりなど、多くのことを学ぶことができた。
- ・後日、学校の運動会の反省に学生の働きを称賛する声があったと連絡があった。

#### 第8回

- ・小学校の運動会に参加し、応援合戦が盛り上がっていたので取り入れたい。そのために応援歌をみんなでやってみるのもよい。学生に団長を作ってやってみる
- ・種目は5月でよい。
- ・時間はこの前でぴったりだったので何か削らないとできない。障害物は盛り上がってよかった。
- ・1分で勝負がついた。数えるのに時間がかかった。玉入れの数を増やす
- ・思っていたより高学年は高度なことをやっていた。低学年は踊りを入れて玉入れをして工夫していた。自分たちでやっていた。

- ・1年生と一緒にいたが、1年生は午前中であきてしまっ遊び始めていた。低学年は我慢できないから1年生もあきないようにプログラムを考える。高学年も楽しめるようにするとよい。
- ・これからの組織を決めて、3年生に説明をする。
- ・1年生に説明に行く。わかるように説明するのは難しいが、ちゃんと説明して組織を作る。
- ・実行委員を2倍にして、教えていく。各学年にリーダーを作る。
- ・22日に説明をする。説明する内容を検討し、係りなどについての募集を記したお便りを貼り出す。
- ・見通しを立てて、順序立てて話す。係りが決まっからの動き方を教える。責任者との打ち合わせをどうするか（いつ 何を どこまで）
- ・係ごとに動くシステムを作るとよい。進行係りだけで話し合うように進めたらどうか。
- ・今の係りを引き継ぐ。その中で何をするか。
- ・動き出すのは4月から。看板や得点板はまだ作らなくてもよい。
- ・役割や仕事を分担する。定期的に新聞を出す
- ・今まではこうだったが、これからはこうする、という説明と組織の内容や構造を、それぞれの立場を説明する。募集になると、やる人ややらない人がでてくるので、半強制的にやったらどうか。
- ・アンケートをして、やってみたい競技をきく。スローガンも募集する。
- ・実行委員を決める。そのために、実行委員を募集する。部活の人は当日 もっと詳しく話をしっそこでやったことを説明する。

#### 第9回

去年の反省 組織の内容の呼びかけを1年生に行う。

### 3. 学生アンケートより

[学んだこと]

- ・子どもと触れ合い、身近にその行動などを見ることができたこと
- ・子どもの年齢とその発達や接し方の違い
- ・ただ遊ばせるのではなく、ルールの中で遊ばせなければならないということ
- ・たくさんの人の協力が必要であること
- ・コミュニケーションの難しさと大切さ
- ・みんなでやりぬくことの楽しさ
- ・達成感
- ・運動会について知ることができた。
- ・実施する側の視点を持つことができた。
- ・準備やリハーサルの大切さ
- ・さらに子どもが好きになれて、先生になりたいという気持ちが強くなった。
- ・改めてスポーツの楽しさを子どもたちに伝えたいと思った。

〔良かった点〕

- ・ブラカード係と補助で誘導したので、計画通りに進めることができた。
- ・運動会の協力者に役割や係を振り分けることによって、参加意識を高めることができた。
- ・これまで話をしたことのない人とも話ができた。
- ・スポーツ講習会はよい。
- ・当日参加できない人も準備を手伝っていた。
- ・学年を越えて協力できた。
- ・スポーツを通して地域の子どもたち触れ合うことができた。
- ・子どもたちが笑顔で楽しそうにしていた。

〔反省点〕

- ・1種目ぐらい増やした方がよい。
- ・父兄も参加できる種目をつくる
- ・親子で参加できる種目があった方がよい。
- ・学生と子どもたちが一緒にできる競技を作りたい。
- ・運動会とスポーツ講習会を一緒に行うべきではない。

- ・用具の事前確認を徹底する。
- ・流れ、詳細すべてを理解している人をもっと増やす。
- ・学年ごとの役割をもっと早いうちから明確にしていくべきだった。
- ・子どもたちに次の動きをスムーズに伝えること
- ・実行委員会の負担が大きすぎる。
- ・リハーサルをスムーズに
- ・指導や誘導方法をもっと考えておきたい。
- ・もっとたくさんの子どもたちが来てくれるようにアピールしたい。
- ・子どもたちの能力を考慮してルールを決める。
- ・連絡を円滑にする。
- ・もっと多くの学生が参加するようにする。
- ・もっと早い段階で協力して入れば、実行委員の負担が少なくなったのではないか。
- ・マナーをきちんと決めなければならないと感じた。

### Ⅲ. 考 察

#### 1. 昨年度との比較

運動会はこどもスポーツ教育学科全体で運営するものであり、2年目を迎えて、どの学年が主体となるのかということが問題となった。そこで、話し合いの結果、新2年生が主体となり、新3年生が補助、アドバイスをすることになった。

この運営方法をとったことで、順調にいった面といかなかった面があった。

よかった点

- ①昨年度の実施方法に基づき、反省を生かすことによって、見通しを立てて運営し、実施できた。
- ②3年生によって、準備段階での流れの把握と留意点の指摘があり、運営は昨年度より、順調に進んだ。
- ③運動会当日は、3年生のサポートにより、安全対策や速やかに進行するためのさまざまな配慮がなされた。

## 2. 実施方法における改善点と反省点

2年生が中心となり3年生がアドバイスをしながら企画・運営していくという形は、現代の若者の問題点とされるコミュニケーション力の欠如を露呈した。話し合いで決定した内容や進行状況の報告があまりなされなかったために、協力体制がなかなか確立されなかった。常に、決定事項や進行状況を報告することは教育の現場だけでなく、仕事をしていくために不可欠な手続きであり能力である。そこで、伝達の手段や記録の方法などを確立していくことになった。掲示板の活用、定期的な新聞の発行、記録を取るだけでなく、資料としてまとめておくことなどが提案され、来年度から実施することになった。

また、委員会活動開始時期を早めて、じっくりと話し合いをしながら運営を進めていくことになった。このことにより委員会組織が固まり、先輩から後輩へ十分に仕事の内容や方法が伝達されてから、運動会の運営を始めることができ、進行がしやすくなるだけでなく、よりよい実践に向けての改善を重ねることができるようになると考えられる。

昨年度は運動会の内容や運動会当日までの流れを見通して企画・運営すること、そして、学年間の連携が課題としてあげられたが、今年度は異学年間の交流の方法とこれに伴うコミュニケーション力が課題となった。今年度の反省に基づき、全学年がそれぞれの立場で協力できるようになれば、学科をあげての取り組みとして定着していくだろうし、学生主体の運営に移行させることができるだろう。

組織・運営し、児童が参加して実際に運動会を体験することは非常に重要であり、模擬体験として位置づけていく必要がある。学科をあげての取り組みとなっていて、委員会に所属して中心となって活動する学生、準備から関わり運動会当日も役割を負う学生、運動会当日は参加できないので準備を手伝う学生など、いろいろななかかわり方で必ず参加することになっているが、意識の差は非

常に大きく、せっかくの体験の場を活用できていない学生も多い。そこで、カリキュラムに位置づけることも考えられるが、どのようなシラバスになるのか、指導者や評価など問題も多く、これからの検討である。

運動会実施後に近隣の小学校から依頼されてスポーツ講習会を行うことができたのは、運動会の実施の大きな成果である。今後、このような出前スポーツ講習会を実施していくことは、学生の体験としても地域との交流の面からもたいへん意義のあることだが、けがや事故の場合の対応、準備や移動手段など課題も多く、これもこれから検討していきたい。

## IV. ま と め

教師を目指す学生に必要な力量を形成することが教員養成に求められている。運動会の実施によって育成することのできる教員としての力量についてまとめ、今後のこどもスポーツ教育学科における教員養成カリキュラムへの位置づけを検討する。

昨年度の実践においては中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」（平成17年10月26日）に示された教師像 ①教職に対する強い情熱 ②教育の専門家としての確かな力量 ③総合的な人間力 の3点を拠り所として学生の活動を分析した。今年度は、平成22年10月に東京都教育委員会から「小学校教諭教職課程カリキュラムについて」という報告書についても参考とした。この報告書には、「東京都教育委員会が求める教師としての最小限必要な資質・能力」として3つの領域と、さらに細分化した内容が示されている。その領域とは、

- ①教師の在り方に関する領域
- ②各教科等における実践的な指導力に関する領域
- ③学級経営に関する領域

である。これらの内容は、東京都に限ったことではなく、広く小学校の教師に求められる基本的な

資質・能力である。

学生が主体となった運動会の企画・運営について、中教審答申及び東京都教育委員会に基づいて望ましい教師像や力量形成に求められる資質・能力という視点から改めて考察を試みる。

#### 〈教職に対する強い情熱と使命〉

子どもに対する深い愛情と教育者としての自覚と責任、子どもの良さや可能性を引き出し伸ばすことができる力を身に付けさせたい。課外で行われる運動会を意味のある活動ととらえるには、子どもとかかわることへの楽しさや将来の教師としての自分の姿を思い描き、参加した子どもと触れ合う喜びをもつことができるかが重要となる。単に自分たちで企画を運営し、自分たちが楽しんで達成感を味わうだけの動機では、長期間にわたる運動会の準備を行うことができない。

#### 〈コミュニケーション能力と人間関係形成力の育成〉

教師に必要なコミュニケーション能力を身に付け、児童、保護者、地域住民、同僚等との間に適切なコミュニケーションを保つことができるようにさせたい。参加する子どものこと、場所や時間帯などのことを考慮し、プログラムを作成したり、準備したりする際には、学生同士のコミュニケーション能力が強く求められる。自らの意志を相手に分かるように伝えること、相手の立場や意識を慮りながら物事を順序立てて伝えることなどを苦手とする学生が多い。まずは、学生同士のコミュニケーションを成立させることである。

さらに、子どもたちの参加を促すための近隣の小学校訪問では、相手校の管理職にアポを取り、訪問し、運動会の趣旨を伝え、協力を依頼する、といった一連の流れを具現化しなければならない。学生の企画に賛同を示し、協力してくれる学校ばかりではない。多くの困難な局面に遭遇しながら、自分たちの考えを理解してもらい、学校にポスターなどを掲示してもらうまでにこぎ着けることも学生にコミュニケーション能力を育成する

またとない機会となる。

当日には、初対面の小学生を相手にぶっつけ本番で子どもを動かし、成功させなければならないという難しさがある。就学前から小学校高学年の子どもまで参加する状況で、全ての子どもたちに内容を理解させるような言葉を選び、手順を再確認することは、まさにコミュニケーション能力の発揮の場となろう。

#### 〈保護者や地域住民とのかかわり〉

保護者や地域の方々も運動会の様子を観て、様々な感想をもつ。今年度は、その中で地域の子供会を主催する方から、「スポーツ講習」を実施して欲しいとの依頼があった。学生に投げかけ、希望者を募り、学校の体育館をかりてのスポーツ講習会は、大学と地域をつなぐ良い機会となった。

教員養成の時期には、保護者や地域住民とかかわる機会が少ないが、鶴川祭という開かれた行事と子どもを対象とした運動会という企画において、直接触れ合う場ができる。今年度から準備した「保護者席」の設置は、学生が保護者や地域住民を視野に入れながらこの行事を進めることとなった。

#### 〈組織的に動く〉

教師は、学校運営の一翼を担っており、教育活動は、一人一人の教員が自覚をもち組織の一員として学校運営に協力することが求められている。学生が主体となる運動会では、複数学年の学生が様々な役割を分担し、責任をもって職務を遂行することが大切である。それぞれが分担した係りの活動には、いつまでに、どのように、どこまで進行しているか、何が不足してどのような手伝いが必要としているか、などの意志の疎通が欠かせない。組織として動くことは、「報告、連絡、相談」が重要であり、独りよがりの判断は許されない。

実行委員長を中心とした実行委員会という中心的な組織はあるものの、この委員会を機能させる



のは容易ではない。委員長のリーダーシップ、副委員長の綿密な計画と進行状況の把握、各係りの連絡調整などの経験は、組織として動くことの意味を実感することになり、将来教員となった際に

大きな財産となる。組織として動くこと、人間関係力を高めることは、実際にやってみなければ理解できないものである。こうした状況に身をおくことも運動会の大きな意義といえる。